

張文環小説におけるインテリ人物の特殊性

北見吉弘 *

摘要

作家張文環は台湾の日本殖民統治期における地方社会を背景に多くの小説作品を残した。これら作品に残された成果の一つは当時台湾の封建社会におけるインテリ青年描写ある。

作者の小説作品に往々に主人公として登場するインテリは作者の人生経験を題材とすることから、男性人物が多く登場する以外に、作家の主観性を含有することから、それら人物像は思想性、人生観、及び教育に対する様相が社会一般とはまったく異なるものとして描かれている。すなわち、作者の意図するインテリ男性像造詣の要旨は当時の台湾のインテリ青年一般の描写ではなかったことは明らかである。

本研究は作者がいかなる意図のもと、作家が多くの小説作品においてそのような特殊なインテリ男性を描き、多く主人公として登場させたかを探ったものである。

キーワード: 張文環、インテリ、小説、台湾文学

* 育達商業科技大学応用日本語学科助理教授



張文環小說裡知識分子形象的特殊性

北見吉弘 *

摘要

作家張文環以日據時代的台灣為背景，留下了很多小說作品。這些作品裡面出現不少當時在日治時代知識份子形象。不過，因為這些以主人公的身分出現知識份子的男性形像，其思想性、人生觀、生活及對學問的態度等與當時台灣一般知識分子截然不同的關係，大概作家對知識份子的看法是當時台灣人認同的不一樣。本研究透過張文環日據時代寫小說作品探討作家對知識份子的見解和定義。

另外，本研究也透過作者描寫知識份子形象的情形探討作品裡面所呈現作品所看到的思想性。

關鍵字：張文環、知識分子、小說、台灣文學

* 育達商業科技大學應用日語系助理教授



Specialty of the Intellectual Characters in Zang Wenhuan' s Novel Works

Yoshihiro Kitami *

Abstract

Zhang Wenhuan is the writer who played an active part in the literature activity in Taiwan during a period of the colonial rule by Japan. One of the result that these works showed has the description of the intellectuals young man in the Taiwanese feudal society in those days. The intellectual male characters who appeared as chief character in the story were based on the personal life experience of the author, so there are a lot of similar characters in his novel works. Because of those characters had influenced by the subjectivity of writer himself, so their views for school educations are totally different from the that of the social commoner. From this point, we know that the description of intellectual characters which author drew were completely different from the common Taiwanese intellectuals young man in public.

This article examined why author drew this kind of characters in many novel works, and why they appeared as chief characters in his novels.

Keywords: Zhang Wenhuan, Intellectuals, novel, Taiwan literature

* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University



1、序

日本でも外来語として使われるインテリという言葉は、ロシア語の「インテリゲンチヤ」を語源とし、経営者、芸術家、学者、報道関係者、評論家など、高度な知識を必要とされる人材、及びそれらになるべく高度教育を受けた人材を指した。また、かつて高等教育とは権力者、資産家、貴族出身者が享受するすることが要因となり、その言葉には資産階級と無産階級、貴族と庶民などの間に於ける差別化を意味する要素のあった。だが、日本では昭和に入り高等教育の大衆化が進み、高学歴主義と高等教育授受者の量的な拡大に伴い、無産階級者の高学歴取得者が増えた結果、往來の階級的差別意識が曖昧となり、インテリという用語は広く高度な学問を受けた人物を指す意味が一般化した。

このようなインテリに対する解釈は戦前の台湾においても同様であり、当時の日本植民地政策化の下、義務教育の普及、学歴主義により、多く庶民階層出身でありながら高学歴を有するインテリたる人物が多く台頭した。こうした現状を踏まえ、それら当時の高等教育を受けた意味におけるインテリの様相を描いた台湾人作家の一人が張文環である。

張文環は、自身の戦前(主に1920年代以降を指す)の青年時代を背景に、高学歴学を以って社会に立脚せんと願うの台湾人青年のインテリの様子を描いたことで知られる。だが、作者がその小説作品で記したインテリ像は、当時の台湾におけるインテリ一般とは様相が異なり、極めて特殊な人物造詣が施されている。と言うのも、それらインテリ像は作者の生活体験や思想性を多いに含んだ人物であり、そこには当時台湾において立身出世や個人的至福を旨とするインテリ一般への批判性を多く含むものであった。また、更に作者はそれら己の分身たるインテリ像を通じて、当時の資本主義や拝金主義が蔓延した社会全般に手厳しい批判をおこなった。

全般的には、作者が描いたインテリ像には作者の個人的な道德観や人生観が示され、それらは世間一般が認めるインテリとは異なることが伺える。今回の論文は、それら作者の描いたインテリ像が当時の社会一般のインテリとの違いを分析し、かつそれらインテリ像の有する特殊性を通じて、いかに作者が当時の台湾における学歴主義に対して問題意識を有してたかを示したものである。



1・作者のインテリに対する問題意識

作者がその作品で使用用語として用いた「インテリ」或いは「知識階級」とは、主に公学校から大学や師範学校までの高等教育を受けた人材を指す。だが、作者の小説世界における男性人物に特定した場合、当時の世間が認めるインテリは主に師範学校の学生、或いは大学で法律や医学専攻の学生が主となり、これらは金、権力、地位すべてを含む将来性が約束された人物とみなされた。その中で、作者が最も多く意識したのが法学と医学を学ぶ学生であり、作者の幾多の小説作品においては、それらが実際に学歴主義社会における花形であったことが理解できる。以下は「山茶花」からの引用である。

しかし賢はさいはいに高等学校に這入ることが出来た。皆は喜んでくれるだらうと思つてゐたが、案外医専に這入つたのではないので親類達も大して喜ばなかつた。賢が医者になつてくれれば、村に帰つてきたら面倒を見てくれることもあるだらうが、文科となると、本島人では役人になれさうもないし、また中学の教員になれるかどうかこれも問題である。高等学校の文科なら弁護士になれる学校にも入れるときが、しかし出世がまはりくどくいやうで、賢の家と親しくする者が少なくなつて行つた。金を借りられる恐れがあるので、親類や友人達はそれで遠ざかつて行つた。¹

当時の台湾における一般人が認める学問や進学は「出世」を旨に医者か弁護士になることを目的にすべきものであり、彼らは主人公の家父に対して「文科は詰まらないから、医者に転向してはどうだ」²と勧めたほどである。だが息子の性格を理解する父親は「少なくとも賢の考へはわしらより長けてゐる所があるかも知れない。文学と云つても大学に上がれば、法科に変わるさうだから」³と応えるしかなかつた。ただし、作者にしてみれば、立身出世や金儲け主導の学問は必ずしも将来性を約束するものでなかつた。ここでは、唯一主人公が法科専攻の学生として登場した作品である「父の要求」に関して述べたい。この

1 張文環、「山茶花」、、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、1999年7月20日一版、p.241。

2 同注1、p.241。

3 同注1、p.242。



作品からは、法学専攻の学生を崇拜する当時の台湾人一般の価値観に対し、作者が反社会的な見解をもってそれを否定していることが示されている。その要素となるのが、作者が多く作品において主人公を文学、哲学といった人文科学専攻の学生に設定したことであるが、文学や哲学などは当時の台湾では世間的に評価が低く、それらを専攻する学生は俗世間から蔑まされ、インテリとしての尊厳は与えられなかった。主人公の阿義はたとえ専攻は法学であるが、その実、「通俗物から大衆小説の単行本等」から「中央公論や改造の小説」⁴に至るまでの文学を愛好し、さらに思想や哲学にかぶれ、「共産主義」、「民族解放」⁵などに関心を示し反社会運動に参加し警察に検挙され拘留されたほどの人物である。⁶主人公である阿義の法科専攻の動機は自主的なものでなく、法科専攻を懇願する両親の要求を拒めなかったことによる。この阿義の両親は、立身出世主義を盲信する台湾庶民一般の典型として描かれ、息子に対して期待したところは、権威や名誉の象徴たる「金モールのきらきらする制服」⁷着て、故郷に錦を飾ることである。その父母の考える息子の学問修得の目的とは、経済的には「大金儲け」⁸が期待でき、身分的には「郡守」⁹になることである。要するに、当時の庶民階層が高学歴取得を願う息子に対して期待したのは、当然ながら将来的な生活の保障と安定、そして願わくば立身出世の実現であった。

ただし、作者はこのような世間一般の立身出世のみに重点を置く学問への見解を批判し、「父の要求」における法学専攻に対しては「従順に無學な父や母の注文」、「父や母の盲目的な教育」¹⁰だとし、また主人公阿義の日本留学に費やした歳月を「自分を行き詰まらせた過去数年間の無駄な努力」¹¹とも論じ、その自主性の欠けた学問への取り組み姿勢を否定した。このように作者は世間的评价や自主性の欠如をもって己の学問の方向性を定める当時の学生に対し、以下のような見解を示した。

4 張文環「父の要求」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』、p.49。

5 同注4、p.67。

6 このことは作者自身が日本留学時代に実際に運動に参加し日本の警察に検挙された素材がそのまま生かされ、思想面においては作者のプロレタリア文学、台湾社会批判の立場の主張がなされている。

7 同注4、p.46。

8 同注4、p.46。

9 同注4、p.46。

10 同注4、p.47。

11 同注4、p.46。



第一司法科にパスして辯護士をしてゐる人で阿義の父や母は幾人も見た。要するに口の達者な人でなければならぬといふことは第一條件になつてゐる。さもなければ阿義のやうな人が辯護士になつたら切度所謂る毎日事件がないから事務室の机でたかつて来る蚊をばちばち打つのが關の山だ。(中略)無口で臆病だ。無口は辯護士になれない。臆病は醫者になれない。とすると阿義の持つ天分はこの社會では受け入れられず、丁度生活の脚をさらはれたやうにまるで能のない人間になつてしまふ。¹²

単に世間的評価で己の学問を定める多くの学生が見過ごしであること、それは自身の「天分」に対する理解である。即ち、いずれの学問に対しても、己の「天分」が合致していなければ、学問の成就是望めないものである。それが、高度な教養が要され、厳しい資格試験が伴う弁護士や医者になるための学問では尚更のことである。作者が観察した当時の学生たるインテリに対する印象は、学問に秀でた人材と言うよりは、主に俗世間的な榮譽や地位や権力に固執した人物としてのものである。作品「土の匂い」の主人公清輝は日本留学で文学を学んだ大学卒業生であるが、俗世間がインテリは医学や法学の専攻すべきとする盲目的な学問に対する様子に対して、以下の如く諧謔的な批判を示してゐる。

見舞にきた親類たちも、清輝が東京から何かえらい鑑札を持つてかへつてきた様な口のきき方だつた。それに対して清輝はかへつてユーモアを感じずにはゐられなかつた。田舎の人達にとつては、医者や鑑札かもしくは何かの鑑札をもらふ他に、いいことがあるとは思へなかつたのである。¹³

以上のような主人公清輝の俗世間に対する批判は、作者がインテリ青年として描いた全ての主人公が感じたものであり、一言で言えば「現代教育の缺陷は人格を陶冶するのではなく、立身出世をめざしてゐる暗記の試験に過ぎない」¹⁴という結論が導かれる。

ちなみに張文環の小説作品のインテリ人物が女性の場合においては、作品「二人の花嫁」の登場人物の一人に公学校制度制定後の間もない頃の女性卒業者の阿

¹² 同注4、p.47。

¹³ 張文環「土のひ」、『臺灣文藝』七月號(一 第三號)、1944年7月、p.7。

¹⁴ 張文環「土のひ」、『臺灣文藝』七月號(一 第三號)、1944年7月、p.5。



嬌を「インテリ」だとみなす記載が見られる。以下の通りである。

智高さんの娘阿嬌さんと云ふのは、その街の公学校の第二回か第三回目の卒業生である。だから品弱といひ乍らもその街のインテリ女性の一人である。彼女もさう自負してゐる。三十何年まへの女の公学校の卒業生といへば珍しいものである。¹⁵

作者の作品には「落蕾」秀英、「山茶花」娟、「芸姐」采雲など、公学校就学を最終学歴とする女性が少なからず存在するが、阿嬌の場合は女性の学校教育がまだ普及していなかった時代にあることで、「インテリ」として重宝された。作品には、高学歴取得者がインテリであるとする歪んだ世間的価値観の様相が示され、引用に見られる「インテリ女性」という言葉は高学歴取得者を指してのことであるが、作者は、その学問取得の目的や動機が、「どうしても醫者さんか、公学校の訓導先生でなければ絶対に嫁に行かない」¹⁶ということ、即ちより条件の良い縁談の獲得、即ち封建的利害結婚の対処にある。当時のインテリたる人物の利己的、個人主義的、唯物主義的な一面を描き出したものとみられ、男性に於ける学問の目的が立身出世なら、女性におけるのがより条件の良い結婚の実現に過ぎない。男女それぞれの考えは現在の社会に通じるものであるが、いずれも個人的な至福を目的に学問を修得したことに変わりはない。

3・作者の描いたインテリ

3.1・出身における特殊性

ここでは作者が中心的に描いたインテリ像が如何なる人物として描かれているかを見てみたい。以下は作者の作品において公学校卒業から高等学校進学など、いずれも高学歴取得の最中にある男性を主人公にした作品を発表年代別に並べたものである。

¹⁵ 張文環、「二人の花嫁」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p.95。

¹⁶ 同注16、p.95。



| | 作品（発表年月日） | 人物 | 身分 |
|---|---------------------------------|----|----------------------------|
| ① | 「落蕾」（1933.07.13） | 明仲 | 日本の大学で勉強する留学生 |
| ② | 「父の要」（1935.09.24） | 阿義 | 日本の大学で勉強する留学生 |
| ② | 「父の要」（1935.09.24） | 阿義 | 日本の大学で勉強する留学生 |
| ③ | 「山茶花」（連載小説 1940.01.23～05.14） | 賢 | 学校在学から日本の大学 在学を背景とする学生。 |
| ④ | 「地方生活」（1942.10.19） | 澤 | 日本の大学の卒業生 |
| ⑤ | 「土の匂ひ」（1944.07.01） | 清輝 | 日本の大学の卒業生 |

以上の五作品は今回の作者が高校、大学などで就学中、或いは大学卒業をしたの男子青年を主人公とした作品であり、題材としては公学校就学から日本留学期間に至るまでにおける作者本人の自伝要素を含む人物である。¹⁷③「山茶花」が公学校時代から大学入学後の段階、①②が大学就学期間における段階、④⑤がちょうど大学を卒業し帰郷したばかりの社会人としての自覚を持ち始めた段階となる。これら作品で、作者が男性人物に対して「インテリ」という用語を使用した作品が②「父の要求」である。作者は主人公である阿義を自己の作品におけるインテリの典型として以下のように論じている。

だから阿義はこんな辺鄙な田舎にゐても、しかも村全体から言えば阿義の家は決して金持ちだとは言へないにも拘わらず、中学を出、台北の高校を出て東京の大學にも入れて貰ったのである。（中略）だから私は實を云ふとこの物語の題目を坊ちゃんとでもつけたかつたが、坊ちゃんにしては、金仕ひが餘りに吝々してゐるし、それからと云つて世間を見る目が餘りに邪氣なさすぎて、世の中の苦勞がわからない。で結局はこれもただ臺灣の一人のインテリにすぎないと考へた。ただ一人のインテリであるならばどれもこれもその家庭は大抵は似かよつてゐるところがある。¹⁸

①から⑤までの全ての作品に共通し、作者の意図するインテリは小資産家

¹⁷ ただし作品「頓悟」に関しては主人公の性格描写にインテリたる要素が加味されているが、身分が商店店員であるため保留した。

¹⁸ 張文環「父の要求」、『日本統治期台文 台人作家小集 第四〔張文環〕』、p.46。



階級¹⁹の人物が主要となり、生活手段の持たない庶民階級と世襲的に生活の安定した資産家階級のちょうど中間に位置する。まずは、処女作②「落蕾」において、日本留学生として登場した明仲に関しての引用を見てみたい。以下は日本の大学に留学中の留学生の明仲がその公学校時代の親友の義山に対して論じた箇所引用である。

義山君。僕の家は第三者の君から見ればいかにも裕福に見へるだらう。しかしさうぢやないのだ。親爺は毎日一家の經濟をどう云ふ風に切り廻はして行くかと、しよつちゆう頭をひねつてゐるのだ。つまり一家が段々貧乏になつて行くことばかり精神を使つてゐるが、僕は親爺にまさつて悩む範圍が廣いのだ。²⁰

①から⑤の作品の主人公に共通することではあるが、この明仲も張文環の分身たる人物であり、作者の人格、性格を受継ぎ、その社会観、思想性、道徳観といったものを代弁する役割を担う。一家が徐々に衰え無産階級となることに関しては、張文環の家庭が雑貨店経営であったことに関連する。作者の中学、高校進学、日本留学などの実現は、主にその出身が中流家庭かそれより上であった家庭からの援助ことが要となる。そして、それらに対する主人公たちの様子には、家庭への学費捻出の負担、援助に対して、少なからぬ罪悪感、引け目のごとき自責の思念を描いた作者の本心が露呈している。作者の作品において、その少年時代から青年時代に至るまでの長期にわたる自伝的要素が極めて濃厚な作品となった③「山茶花」では、主人公の出身家庭がいちおうは「金持」²¹に属する「中流以上の家」²²と認めながらも、生活基盤たる商店経営が

19 「小資産階級」という用語は中国や台におけるものであり、日本語の「小金持ち」、「中流階級」、「プチブルジョア」に似たもの（合致したものではない）である。一 のところ家庭に資たる名目はあるが、生活手段の基盤は脆弱であり、中には他人に働力を提供しなければ生活が成り立たない階級の意味合いもあることから、資本家階級と働者階級が混同した形となっている。以下はネットよりの引用である：「小資産階級在馬克思學説是指介乎資産階級／資本家及無産階級者，例如小商人、小手工業者，既不剝削人亦不受剝削。中華人民共和國國旗的其中一顆小星就是代表「城市小資階級」。（小資産階級- 維基百科，自由的百科全書 zh.wikipedia.org/wiki/小資産階級。）

20 張文環「落蕾」、『日本統治期台文 台人作家小集 第四（張文環）』、東京：蔭書房、1999年7月20日一版、p.9。

21 同注1、p.165。

22 同注1、p.131。



「せいぜい一代や二代で店が衰へてしまふのが普通である」²³と論じて、その家庭が世襲制度による繁栄でないという立場をはっきりさせた。このことは作者が無産階級の立場にあらうとしていた立場を意味している。以下は、主人公である賢の高校時代における家庭経済の様子を示したものである。

しかし賢は受験勉強で忙しいのであるが、（中略）一と月一度なり家にかへつてきてるので、感じやすい賢には家の経済状態がよくわかつてゐた。両親は彼を大学まで行かせるのに、勢一杯出して儉約してゐることを、たとへば父の煙草を見てもわかるのだつた。今まで敷島だとか朝日などを吸つてゐたが、今度はキザミをつかつてゐた。村で指折の商店主人なら、さほど儉約しなくてもいいと云ふ人さへあつた。²⁴

作者本人の実際の家庭経済状況が創作内容と一致するか否かは別に、引用に示された如く主人公賢の育った家庭を見ても、これを代々にわたり利息や財産で豊かな生活をつづける世襲貴族たる存在に連想することはできない。即ち、多く自伝的要素を基本に造型された作者が描きたいと考えたインテリ人物は基本的には無産階級の出の者に限られたことが理解できる。作品①「落蕾」明仲の場合、それが「小金持」であると前置き、そして「没落して行く家」²⁵という設定となり、また「山茶花」においては、「賢、お前はどんな職業に就くつもりだ。（中略）賢、お前は金持ちでもないのに、いつまで勉強をしては居られない」^{26 27}などとあり、再三にわたりそれら人物が封建的世襲制度の恩恵を受けた「金持」には属さないことが強調されている。とりわけ、家庭環境が無産階級に近いことは全ての作品に論じられているが、その一例として②「父の要求」において、主人公の両親が主人公宛に送った手紙文の内容に関する場面を引用したい。

父や母はお正月のお餅の又食べてゐない時から、もし卒業したらその學士の證書を先に送ってきて下さい。若し入用でしたら又送り返しますからと

23 同注1、p.165。

24 同注1、p.242。

25 同注20、p.10。

26 同注1、p.241。

27 同注1、p.241。



云ふやうな手紙がきた。それから高文の試験の準備で忙はしいでせうと、干肉を送つてくれた小包の中に人参も二三本入つてゐるから其の飲み方二三の方法と、それからその證書は公學校から大學迄費やした金と利子を合わせたら一萬近くもする代物であるから大切にしろと云つて、何か箱でも買つて入れて置くといいと云ふ所で手紙を結んだ。阿義は單純な父の手紙にいつも涙ぐんでしぼらしの間はその感に堪えないやうにぢつとして、(以下省略)²⁸

作者が作品内で実際に用いた「書生の身分」²⁹の一言からも、その小説作品で限定する意味での男性のインテリの家庭環境は、至極無産階級に近く限定され経済的にゆとりの無いものとなっている。

作者がそれら主人公をして中流階級に属し、かつ資本家階級ではないという念頭には、作品「山茶花」で論じられているように当時の台湾に多く見られた「利息で生活してゐる」³⁰権力者、即ち作者が多用する「金持ち」勢力側、主には封建的な世襲貴族に対する批判意識があったこと、即ち無産階級の文学運動に携わっていた作者本人の立場があったことに由来する。作者の思い描くインテリ像は経済的安定が約束された封建的世襲貴族には属さないため、学歴取得後における社会的経済基の確立は家庭経済の後ろ盾尾が望めない人物に限られた。作品③「山茶花」には「知識階級」という用語が見られ、以下の通りである。

自分はこれから大学に行くが、しかし娟が思ふほど光栄でもなく、また出世でもないのである。(中略)台湾の今までの例をみると、自分が金持でない場合は金持の婿になることである。元来台湾の富豪は利息で生活してゐるものが多く、資本主義の波に乗つて企業するものが少ないので台湾の知識階級の行く場所は決まつてゐるのである。³¹

作者の作品における青年知識人において地位と名声に合致した立身出世

²⁸ 同注4、p.46。

²⁹ 同注4、p.67。

³⁰ 同注1、p.205。

³¹ 同注1、p.295。



を叶えた（或いはそれが望めるような）人物は一人も登場していない。引用における「台湾の知識階級」に対して、「その家庭は似かよつてゐる」と論じられている如く、貴族出身者を想定した「利息で生活」してきたインテリは除外されている。それは、作者がこれら主人公をして無産階級に等しき身分にしたことには、封建的世襲制度に対する批判を強く含んでいたからである。①「落蕾」の明仲が日本留学をする目的は、地位や名誉を中心の立身出世主義でなく、あくまでも自己修練の如く己の内面性を強めること、無産階級たる困難に打ち勝ち社会で生き抜くことにある。以下は作品よりの引用である。

僕は小金持故、さう云ふ苦痛はなめてゐなかつた為に、肉體的にも精神的にも生活力をきたへられてゐなかつた。本を讀むだけじゃ飯にならないからね。だから僕はこう思ふのだ。本當に生活の切迫詰りに繰返し何遍も直面する事が、ほんたうの人生を凝視める最高の教訓だと思ふのだ。いかにも僕は留學生だ、君は百姓と労働をやらされてゐる、世の中では君と僕と階級が違ふ、だが社會に對する君と僕の役割は同じだ。³²

ここには将来的には無産階級に陥ることを想定した中流階級出身者の社会適応に対する心構えが示されている。作者はあえて主人公として描くインテリ男性に対しては例外なく学問や進学を立身出世の手段とせず、人物設定を施しているが、これは世間一般のインテリに対する誤った見方に対する反意の表明でもある。主人公たるインテリ男性像は往々に文学専攻が多いのが顕著であり、実社会の矛盾性を意識し民族問題、道徳問題を意識しつつも、ある意味、当時の庶民一般が蔑んだ立身出世とは無縁の人物となっている。

3.2・学歴、専攻における特殊性

作者が如何なる理由でインテリたる対象を、恵まれた環境で高等教育を受けた資産階級や貴族階級の出身者でなく、社会的に出世が困難な無産階級者に限定したかを考慮した場合、まず、その要素となるのが、作者が多くの青年男性を文学、哲学といった人文科学専攻の学生に設定したことである。だが、文学や哲学などは当時の台湾では世間的にも評価が低く、それらを専攻する学生

³² 同注20、p.10。。



は世間から蔑まされ、インテリとしての尊厳は与えられなかった。作者はインテリたる人物が立身出世とは無縁であることを認知しながらも、それら人物の学問の中心を人文科学だとしたのは如何なる根拠があるのであろうか。

作者が主人公として描いたインテリ像が意図することは、社会批判の精神をもって、当時の台湾社会の価値観や道徳観における矛盾に目を向け、それを強く意識したことにある。作者が主人公として描いたインテリ青年の特徴は、②「父の要求」を除き、どれもが確固たる信念をもって学問に取り組んだことにある。③「山茶花」主人公の賢は、①「父の要求」主人公の阿義に比べ、その当時は批判的であった文学専攻に対する信念や自覚を徹底しているのが特徴である。以下は作品からの引用である。

「お父さん、僕は家の経済が許す限り勉強したいと思ひます。お父さんがおつしやるやうに、最善を尽くして後は天命を待つばかりです。僕達は、平安であることが出来れば、お父さん、僕は昔僕達が辺鄙な部落で暮したと同じやうにやりなほしてもいいのです。それが若し天の命令であるならば、お父さん僕達はどんなにさからはふと思つても駄目なのです。要するに僕達は人となるからには、一つの達観がなければなりません。³³

主人公の勉学に取り組む姿勢が表れ、同時にその思想性への賛同が示されている。父親が以上の息子の発言に、「自分は五十になり、そして、三国誌や列誌を読み、いろいろ時代の変遷をみてきた結論を、自分の息子の口から出てきたやうなもの」³⁴と感じ取り、息子の人生に達観した様子に感銘であるが、これは作者本人の思想性を代弁したのものである。

⑤「土の匂ひ」の清輝は、「東洋の異民族に対する政治道徳」、「民族問題」³⁵を憂い、日本留学中は「東洋政治道徳の理念」³⁶を理解するために、主に文学を勉強した学生の設定である。

清輝は、英文学から佛文學に入り、佛文學から再び東洋文學にとかへつて

³³ 同注1、p.242。

³⁴ 同注1、p.242。

³⁵ 同注14、p.5。

³⁶ 同注14、p.5。



きた。さうした思想の旅は、彼の場合極く自然に行はれ、當然歸る所へ歸り着いたといふ感じ理解するために西洋文學をやつたのではなかつたか。³⁷

人物は帰国後も、都会での職探しに失敗し、また惰性的に不本意な仕事を請け負いながらも、文芸雑誌出版の友人と連絡し、また民族問題に関する記事を書き続ける。即ち、資本主義的経営で大金持ちになった「金儲けの上手な、隅に置けない女」³⁸である阿鶯が意識する「台北の知識階級」とは異なる存在であり、生き方における価値観そのものが当時一般のインテリたる人物とは様相をことにするものである。

以上、文学専攻はそれら人物の「天分」にあった学問であったことが伺える。それぞれ人物は道德觀念が強く、当時の社会的矛盾を強く意識する性格となっている。そういった内面性を有することが、主に立身出生を至上とする功利的な学問に対する反意を芽生えさせたと言える。要するに彼らは己の性格、趣向、信念に従い、純粹に学問を極めたに過ぎないのである。

3.3. インテリ為るべく思想性における特殊性

作者の描くインテリは、その道德意識や人道主義から、個人主義的、功利主義的、資本主義的などの当時では既に普遍した価値観が受け入れられず、近代化に伴う拝金主義化が進む都会における発展は断念するよりなかつた。作品「頓悟」は「都会生活」³⁹における青年の為徳の雑貨店勤務を通じた知識人としての内面の葛藤の様子を描いた作品である。この物語の主人公である為徳は将来、大学に進学することを願いながら、現状では生活維持や学費捻出のために都会の呉服店に勤務する一青年の身分である。為徳が台北における老舗呉服店勤務を通じて通関したのは、当時のインテリたる人物の過酷な現状であった。以下は為徳の働く呉服店の店主が為徳への忠告の意を込めて述べた学問に対する見方である。

³⁷ 同注14、p.242。尚、この箇所引用には文法的な誤りか脱字とも思われる文章表記の問題点が特に強いが、いちおう原文のままのかたちで残した。

³⁸ 同注14、p.32。

³⁹ 張文環「頓悟」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、東京：緑蔭書房、1999年7月20日一版、p.219。



學問と云ふのはやはり社會の地位を得るための學問でせう。自分の生活を樂にする、即ち自分の生活を解放するための學問でせう。(中略)商賣は即ちそれです。さうではないでせうか、少なくとも私はそれを經驗してゐます。世のなかの人の云ふ文化運動の青年と云ふのは、ありやみな無能な青年が寄生蟲的にやつてゐることだ。金さへ儲ければ自然に紳士になるし紳士は即ち文化運行を牛耳るのだよ。だから一生懸命に金儲けの工夫をして居ればいいのだ。⁴⁰

ここには作者が己の分身として描いたそれぞれのインテリ像の精神面における純粹さが見られる。張文環は往々にその小説作品に往々に商人や会社、工場などの経営者を資本主義社會が産んだ「金儲け」の権化とする見方を示しており、作品「土の匂ひ」においては「商人と知識階級の頭の相違がある」⁴¹といった見解と示し、資本主義の波に乗って商売する人物の思想性において「文化も姜売りより始まる」⁴²といった呉服店店主の為徳と同様の考えがあることを示し、またそれら資本主義社會を金で動かす人物が「いかに金持ちになるかを考える」⁴³だけの存在に過ぎないものと断定しているが、とりわけ肝心なのは、同時にそこには新時代に直面したインテリ青年の社會適應における困難な様相が示されているということである。「社會の地位を得るための學問」とは立身出世を至上とするもので、前述したように作者が批判対象とした立身出世主義に従い學問をするインテリ学生のありかたである。そして引用で述べられている拝金主義の蔓延した都會に適應すべく求められるのが「社會の地位を得るための學問」であるというこが社會的価値觀として浸透している以上、社會一般のインテリと作者の描いたインテリ像との間の學問や學校教育に対する価値觀の違いははっきりしており、作者は主人公の為徳を通じ「じじつ主人のおつしやることは全くその通りであるが、しかし、私は何か知ら納得がいかないやうな氣がしてならなかつた。(中略)しかしそれは或は自分の田舎青年の氣質であるかも知れない。店主のおつしやることは、紳士になる骨であるかも知

40 同注39、p.221。

41 同注14、p.43。

42 同注14、p.43。

43 同注14、p.43。



れない」⁴⁴と論じ、当時の世間がインテリとみなす「紳士」たる身分に懐疑的な立場を示した。この「紳士」たる人物こそ、恐らく作者が考えるところの都会的、個人主義的、現実主義的な思想性を有する、即ち現代社会の要求するインテリのあり方なのであろう。この「紳士」たる存在に対して作者が批判的であるのは言うまでもない。以下は④「地方生活」からの引用である。

一体紳士と云ふ言葉と君子と云ふ言葉はどこが違ふか、（中略）紳士には規律はあるが、雅気はない。人に迫まるものがあるが、譲るものがない。譲ると迫まるは同じやうなものにならぬだらうか。譲るゆとりがなければ、従つてくる気持がなくなる。⁴⁵

現代社会におけるインテリが「紳士」たる身分に相当するものとなるが、実際作者が描いた「田舎青年」に属するインテリ男性は、近代的な「紳士」というよりも中国伝統の「君子」たる身分に近い。それらインテリ男性は少年時代に儒教教育や漢文教育を受けており、『論語』の君子たるの道を重視するため、価値観としては社会における指導者たるべく、それにふさわしい「徳」が必要であると認識する。こうした近代的、伝統的の狭間において作者により描かれたインテリ青年は「孔子と現代の新奇な学問とはどこが違ふか」⁴⁶という難問に対峙する。そして、そこで彼らが導き出した解答が、倫理道徳や人間性を重視した伝統的な孔子の学問への支持である。以下は関連箇所を引用したものである。

たとへば中庸の道だね、これを論語的に、つまり儒教的に、物を考へて、現代科学の進歩してゐる社会道徳を考へないでゐたら、一つも中庸にならないではないか。⁴⁷

作者が強調した「中庸の道」とは、道徳的価値観を体とし科学の進歩を用とする考えである。だが、個人主義、資本主義が一般化し、伝統的道徳が失われつつある現代社会においてはそのような価値観を貫くことは現実的に困難

44 同注39、p.222。

45 張文環「地方生活」、『日本統治期台文 台人作家小集 第四（張文環）』、p.299。

46 同注46、p.292。

47 同注46、p.292。



なばかりでなく、資本主義化が蔓延する世の中では時代錯誤であるとの誤解を招き易いものである。だが、作者の描いたインテリ男性は伝統職豊かな地方社会の出身者として統一されており、多く儒教における「君子たるの道」の伝統教育を受けたため、時代の変遷に伴う個人主義的な価値観を容認することは不本意なことであった。道徳的価値観、人徳のある人間性、そして本当の意味での君子たることを願う人格、これら全ての要求を己に課した結果感じたところが、当時の拝金主義が蔓延した世の中への不満、かつそれに順ずる立身出世至上主義に導かれた学歴主義への不満でもあった。

即ち作者の意図するインテリとは現代社会における新たなインテリとは異なり、その思想性の特殊性を見ても、旧社会の伝統的知識人に属する存在に近いものである。

4. 作者のインテリたる人物の前途

作品における主人公は、その出身が中流階級でありながら世襲貴族でないこと、かつその学校教育が利害目的或いは功利主義的な立身出世によるものではないことから、その社会人としての活躍は必ずしも前途洋洋なものではない。

日本留学帰りの主人公のその後の身の振り様を描いたのが、「地方生活」と「土の匂ひ」の二作品であるが、この二作品における主人公の日本留学終了、即ち学校教育終了後における社会人としての発展は、新思想や近代科学の象徴である都会よりも、後進的かつ伝統的な田舎に限られたものである。

まずは「地方生活」の主人公澤について論じたい。澤とは、日本留学を終えて台湾に帰国したインテリ青年であり、当初は「都会に勤めて田舎に故郷を持つ」⁴⁸とを「誇らしい」ものと考えていたのであるが、都会における職探しに挫折、断念し、生まれ故郷の田舎へ帰ることになる。物語の冒頭では澤の「職を求めてゐたが、揚句の果ては行李に書物を詰め込んで故郷にかへつてきた」⁴⁹くだりが描かれ、作者の描いたインテリが現代的、近代的な都会生活に受け入れられない現実が述べられているが、これは主人公が、結局のところ

⁴⁸ 同注46、p.276。

⁴⁹ 同注46、p.276。



伝統的、道徳的価値観の残る田舎に属する運命にあることを前提としている。

続いて発表された「土の匂ひ」も、同様に日本から帰った後のインテリの社会人としての生き方を描いた作品である。主人公は清輝であり、やはり「地方生活」澤と同じく帰国後に感じる社会的基盤の確立における不安、そして立身出世が望めないことにおける自責の感情を懐いた様子が描かれている。

留學生の歸郷といふ事は、つまりはその人の留學中に於ける成果の總決算を否應なしに強ひられることだからである。人は故郷に錦をかざつてかへるといふが、己は一體何を以て錦とするかと考へると、清輝には堪へられなかつた。醫學博士か、そこまでゆかずともせめて醫者か、それとも辯護士か、成金か、そのどちらでもない。ただの畢業證書を持つてかへるだけにすぎない。⁵⁰

「地方生活」と同じく、物語の出だし部分は主人公の都会での発展に挫折したことに対する自虐的な内面性描写、及び主人公の生まれ故郷における生活基盤確立に対する不安感の描写が主となる。二作品に共通し、それら主人公の為し得た学問の成果は人間教育や人格陶冶を旨とする人文科学における領域に限られ、かつ、資本主義化の進んだ現実主義的の社会において実用的、現実的な学問（主に医学や法学を指す）を拒んだことから、彼らはインテリが台頭して活躍すべく「都会」、即ち台北における発展に無縁の存在となった。従って、これらインテリ像が実際に活躍すべく場所は、儒教伝統に対する尊嚴、道徳的価値観が少なからず残された地方社会に限られたことになる。

両作品とも、地方社会の自然風景を背景に、人情味ある地元住民との交流を通じ、主人公の新たな生活基盤の確立までの過程が描かれることとなる。そしていずれの作品においても物語の進展につれ、主人公の内面性に変化が描かれ、最終的には「俗界で人といがみあつて、暮らしを立てるよりも、自然を相手にして暮らした方が楽だ」⁵¹といった心境に達することが書かれ、それまで多く俗世間から蔑視され、常に将来への不安を懐き、自虐的意識まで懐いた主人公は、ようやくそういった境地から脱し、精神的自由を獲得するに至る。

⁵⁰ 同注14、p.4。

⁵¹ 同注46、p.280。



それまでは、俗世間から要求された金儲け、将来性、出世などの圧力から多少なりの内面的葛藤を覚え、「都会を切り離して」「生活できるだらうか」⁵²といった不安に苛まされてきたのであるが、やがて、そういった内面性の葛藤は完全に払拭されるに至る。

こうして「地方生活」「土の匂ひ」にみられる日本留学を終えて都会での職探しに見切りをつけた主人公は、しだいに田舎での生活に溶け込み、かつ「田舎」こそが自分に相応しい場所であると感じるようになる。両作品共に主人公の田舎における質素で人間味豊かな生活描写を通じ、最終的には作者が描き続けたインテリ青年の生活基盤の確立に落ち着くなされている。「地方生活」では主人公の澤とその周囲をとりまく地方社会の庶民、親交のある親戚、結婚したばかりの妻婉仔との平穏な生活が描かれ、結果として澤が得たものはあたかも安心立命の如き心情となり、それまで感じたインテリたる身分に於ける不安感や恐れが解消に向かう。以下は「地方生活」澤の結婚後の生活を描いた箇所を引用したものである。

薔薇の花から月來香まで植える。それで家は何から何まで婉仔好みの一色にぬりかえられたやうに、凡ては物静かな平和に包まれてゐた。また職を見つけるまで、拂蘭西語を覚えると云つて、朝早くから起きると、田園に出て散歩をし、歸つてきたら婉仔のいれてくれたお茶を飲み乍ら、語学を勉強する。一生かうしてつづけていけたら、澤は満足することが出来るが、しかし人生は行く先々にやつてくるべき不幸に備へなければならぬので、生活の根底にはやはり不安がはびこつてゐる。(中略)これが澤の新婚生活である。婉仔の髪にはまた二つの真紅な薔薇の花がさしてある。新婚生活と南京豆の殻むきかな、これは俳句にならぬものかなと澤は胸の理想を押へ乍ら庭で小雨に打たれる薔薇の花を見つつ南京豆の殻をはちばちとむいてゐた。⁵³

ようやく心の平安を得ようとするインテリの内面性が、そして地方社会特有の環境に適合したところから得られた主人公の平穏な生活の様相が見られ

⁵² 同注46、p.276。

⁵³ 同注46、p.299。



る。

また、「土の匂ひ」の主人公である清輝の場合においては、生まれ故郷において銀行勤務を経て、依頼された投稿文を書き、会社勤務の傍ら資本家として人を雇い農園経営に尽力するまでの経緯が描かれている。そこにはやはり主人公の地方を生活を通じた精神的自由の様が見られる。

種子が出た芽、その芽は毎朝非常な勢ひで伸びて行くのが見えるやうで、清輝は一つの喜びを感じた。その伸びて行く植物の力は、人間を生かす力もであり、大自然の生への執着でもある。そのために、毎朝新しい生活を迎えるやうな気がするのだつた。⁵⁴

清輝の農園生活は、概して仕合せであつた。姉や友人（阿鶯の如きもの）からのいろいろの干渉はあるが、しかし清輝は思つたことをどんどんとやつてのけた。⁵⁵

性格的、思想的には、当時においてインテリ一般の持つ利己的側面が払拭され、庶民一般のみならずインテリが資本主義的、拝金主義的、反道徳的価値観を受け入れるのに対し、作者の考えによるインテリは社会の趨勢に逆らうかたちで伝統的道徳や純粋な人間性を尊重する傾向を示している。

作者の描くインテリは既に論じた如く、その性格描写、思想性、生きかた、学問の目的などどれもが社会一般のみならずインテリとは異なる人物となり、またここに作者が意図する真なるインテリ像としての主観性が伺えるのである。

5・結論

以上、「落蕾」から「土の匂ひ」までの作品までを対象に主人公として登場するインテリ青年男性像を見てきた。これら人物像は基本的には作者の人生を基本に描かれたことから、人格や思想面における一貫性が見られる。だが、その内面性描写には作品発表に従い、微妙な変化が見られるのも注目される。

⁵⁴ 同注14、p.40。

⁵⁵ 同注16、p.44。



初期の作品である「落蕾」、「父の要求」執筆の段階においてはインテリ男性の都会憧憬、立身出世に対して感じる矛盾、さらに社会的に立身に確信の持てない将来に対する内心面の不安が濃厚に描かれたものであったが、それが後の「山茶花」執筆段階あたりから、内心面における矛盾や不安からの脱却がなされ、更にそれが「地方生活」、「土の匂ひ」の段階に至り自身の生き方への確信へと繋がるのである。⁵⁶

ただし、作者がそれら創作を通じて主張した要旨は単なる都会文明の否定と伝統社会の再評価、インテリ青年の理想像の提示だけではなかろう。留意すべきは、作者が描いたインテリ男性がいずれも新時代に適応した人材、即ち社会の俗世間一般が認めるインテリではなく、旧時代の道德教育を重視する意味で新時代においては適者生存の困難な人物として設定されている点である。そこには当時の台湾社会における批判、また、当時の道德観を喪失した知識人一般に対する批判がかなり具体的なものとなっている。つまり、当時の台湾社会は主に資本主義化や個人主義が進み、多く高学歴取得による立身出世主義を招いた結果、知識人としての質的劣化を招いたと言える。このような人物が世間的に重宝される傍ら、作者はあえて生き方や価値観の異なるところの現実とは異なった、ある意味、作者の主観性の強いインテリ像をその作品に示し、主義主張の手段としたと言える。

作者が最終的に描いたそれら自己の提示したインテリ像らの故郷回帰の様相から理解できるところは、そのインテリたる言葉の意味が、新たな社会を担う人材というよりも、純粹に学問を追及すべき人物という見方が強く、また非現実的な意味において一切の功利主義的要素が排除されているということである。いずれにせよ、それらインテリ像は精神面における高潔さのみが訴えられた感が強く、実際には唯物的な価値観だけを信じる俗世間からは誹謗、中傷、

⁵⁶ この点に関しては、先行研究ですでに論じたところであり、例えば張文薫はその「派遣作家としての張文環—「雲の中」に語られたもの」において、「土の匂ひ」たる作品は「まさに長年の都市生活に疲れ、さらに近代文明を求める過程で故郷で故郷喪失沿を味わった知識人が、故郷でもなく都市でもない土地でこれからの『故郷』を創り始める物語である」と論じており、「父の要求」、「山茶花」、「地方生活」、「土の匂ひ」など青年知識人を主人公とする一連の作品を、「都市（現代文明への憧憬）と故郷（伝統価値が与えた安心感）の間で彷徨う植民地知識人としての苦悩を語りつづけてきた」ものであると論じている。（引用箇所：張文薫。「派遣作家としての張文環—「雲の中」に語られたもの」。『日本台灣學會報』第4號。東京：日本台灣學會。2002.07。p101）



卑下されるべき存在でしかないのも事実である。即ち、ここには当時の台湾社会におけるインテリたる人物の不在、或いは、真のインテリ（作者の主観性による産物として）たる人材が当時の社会において適者生存に属さない現実が示されていると言えるのである。



参考文献

- 柳書琴（中島利郎訳）。「張文環『山茶花』解説—部落から東京へ、進退窮まった植民地の青年たち」。『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。東京：緑蔭書房。2002年8月31日。
- 柳書琴・陳万益・中島利郎（編）。「張文環 著作年譜」。『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。東京：緑蔭書房。2002年8月31日。
- 張文環。「日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]」。中島利郎編。東京：緑蔭書房。1999年7月20日。
- 張文環。「日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二」。中島利郎編。東京：緑蔭書房。2002年8月31日。
- 張文環。「地に這うもの」。東京：現代文化社。1975年9月15日。
- 張文環。「土の匂ひ」。『臺灣文藝』第一卷第三号。1944年7月。台中：臺灣文學奉公會。⁵⁷
- 張文環。「雲の中」。『臺灣文藝』第一卷第五号。1944年7月。台中：臺灣文學奉公會。⁵⁸
- 張文薰。「派遣作家としての張文環—「雲の中」に語られたもの」。『日本台灣學會報』第4號。東京：日本台灣學會。2002.07。

⁵⁷ 底本：『新文學雜誌叢書33』（台：東方文化書局）所の復刻本。

⁵⁸ 底本：『新文學雜誌叢書34』（台：東方文化書局）所の復刻本。

